



風景を醸し出す “ディテール” — 素材・色彩から考える風景 —

昨今「コンクリートから人へ」に始まり、今回の震災でコミュニティの重要が多くの人々に認知され、「ものづくり(ハード)」から「まちづくり(ソフト)」へと、風景づくりの流れが急速に変化しつつある様に感じます。それ自体は間違いではないと思いますが、一方で人々の生活を支えるベースとなる空間そのものの質についての議論が、上記と反比例して徐々に減りつつある様に思われます。「こんな時であるからこそ、継続的にものづくりについて、空間の豊かさについてしっかりと議論をしていきたい!」そう考え、今回のサロンを企画しました。特に今回は、最終的な空間の質に大きな影響を与えると考えられる、“ディテール”のデザインに着目し、土木や建築、ランドスケープ等々に関わりの深い、「マテリアル」「色彩」の両分野の専門家の方々をお招きしてお話を伺うとともに、登壇者・参加者会場全体で議論を行い、風景について語り、分野を越えた議論の輪を広げる夏夜にしたいと考えました。

Guest Speaker



[マテリアルディレクター]

(有)アクリア 代表 / (株)ワークヴィジョンズ PM 田村 柚香里

佐賀県生まれ。福岡女学院卒業後、日本航空国際客室乗員部、特注タイルメーカー(株)スカラを経て、2003年(有)アクリア設立。2005年から(株)ワークヴィジョンズに参画

ー主な参加プロジェクトー

鉄道博物館 (2008年鉄道建築協会賞作品部門特別賞)

プラウド横濱山手 (2008年度グッドデザイン賞)

旧佐渡鉱山工作工場群跡地広場及び大間港跡地広場 (2010年度グッドデザイン賞)

岩見沢複合駅舎 (2010年日本建築学会賞) でレンガプロジェクトを担当





[色彩計画家]
(有) CLIMAT 取締役 加藤 幸枝

武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科卒。大学在学中より日本における環境色彩計画の第一人者、吉田慎悟氏に師事。トータルな色彩調和の取れた空間・環境づくりを目標に、建築の内外装色彩計画を数多く手掛けている

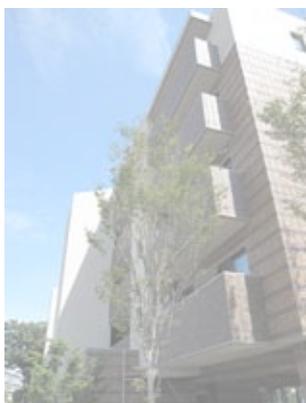
現在、武蔵野美術大学基礎デザイン学科、静岡文化芸術大学にて非常勤講師、府中景観審議会、港区景観アドバイザー

—主な参加プロジェクト—

グランパティオス公園東の街 (グッドペインティングカラー 2000 特別賞)

ザ・ライオンズ武蔵野 (外装色彩計画・インテリアデザイン)

幕張ベイトウン (外装色彩計画)





data

日時：2011年07月30日（土）18：00－21：00

会場：東京都文京区本郷6-16-3幸伸ビル EAU 地下1F

参加費 [ドリンク代]：GSDy 会員 500 円（一般 1000 円）

参加者：全 27 名（GSDy 会員：22 名 非会員：5 名）

Time Table & Summary

18:00 - 18:05 Start & intoro

今回の主旨説明と、初めての会場だったので避難経路とお手洗いの場所のご案内。

18:05 - 18:50 MATERIAL by YUKARI Tamura

まずは、田村さんから「素材」と「風景」についてお話頂きました。

元客室乗務員という一風変わったご経歴をお持ちの田村さんですが、どのようにして“素材マニア”になっていったのか、それがどのように現在の職能を形成至ったのか、笑いも交えながらご説明頂きました。

また、プロジェクトの紹介等も交えながら「素材」と「風景」というキーワードについて話題提供を頂きました。

18:50 - 19:35 COLOR by YUKIE Kato

次に、加藤さんから「色彩」と「風景」についてお話頂きました。

加藤さんからは、一般的には曖昧にされがちな色彩決定のプロセスについて、実際のプロジェクトのご説明も交えながら非常にご丁寧にご説明頂き、参加者も必死にメモをとっているのが印象的でした。

「環境色彩工学」という言葉に初めて触れた人も多かったようで、その理論や方法論に興味津々だった様です。

19:35 - 19:50 Rest Time

19:50 - 21:00 Gest Talk and Q & A

休憩時間を挟んで、最後にお二方と会場の参加者全員で議論を行いました。参加者の質問の手がとまることなく予定時間を30分以上延長する程の熱のこもった会場の雰囲気となり、終了後も場所を移して時間が許す限り、お酒を交えながら議論が続きました....



サロン当日のスライドイメージ [提供:加藤氏より]





Ground Space Design youth Salon

風景を醸し出すディテール素材・色彩から考える風景ーを終えて

マテリアルディレクター | 田村 柚香里

はじめに

7月30日のサロンでお話しするにあたって、はじめに思ったことは「素材」というカテゴリーがあまりに多様であり、また、あまりにも奥が深く、私自身がいったいどこまで素材のことを理解できているのだろうか？ということでした。特に私はこれまで建築や土木、ランドスケープという専門分野を学んだ経験があるわけではなく、「好き」が講じて幸いにも仕事になったようなもので、「素材」についても、これまで学術的に勉強をしたという経験が全くと言ってよいほど皆無であることに、はたと気がついて、お引き受けしたものの少々困惑してしまいました。

そこで、何故私が素材に魅せられ、今に至ったのか？そしてどのように素材と向き合っているのか？について、特に私の専門であるレンガやタイルといった「やきもの」の素材を中心にお話させて頂くことにしました。

素材の歴史に思いを馳せる

サロンでも少し触れましたが、私は幸いにも、前職でおよそ8年間にわたって国内外の様々な街を頻繁に訪れ、都市の景観や建築を「見る」機会を多く得ることができました。

上空から見る街、実際に足を運んで見る建築、そこには常に歴史の積み重ねがありました。その土地で入手できる、いたって身近な素材、例えば近隣で伐採できる木材や石切り場から切り出される石材を使って建てられた建築の集積が、そのまま街の色となり、都市の景観をつくり、地方独特の伝統的な建築様式を生み出していました。

自然素材の代表格である「木」は世界中で数千年の昔から主要な建築資材として構造材、仕上げ材、被覆材として用いられており、場所や環境に応じて多様な役割を担い、「石」は圧倒的な存在感と重量感を持って遺跡や宗教施設に数多く使われている一方で、近くで採掘される石灰岩を使った民家や納屋などが集中する街もありました。実際に石の起源をみても、溶岩流が冷えてできたもの、河川や海の沈殿物が変化したもの、高熱や高圧によって独特の構造になったもの、結晶になったものなど、地球的規模の運動にまで遡る古い歴史のものもあり、それらの歴史が現在の石の豊かな表情と特性を作り出していることがわかりました。

日本では明治期以降使用されるようになった「コンクリート」も、その起源はローマ時代まで遡ります。一方、工業的な素材として絶えず技術的な改良が積み重ねられてきた「ガラス」や「金属」は、原料や製法によって今では数多くの種類があり、強度や物性、機能性の大きな進化によって素材としての可能性を大きく広げました。

また、私の専門である「やきもの素材」の代表である「レンガ」は、『人間が生み出した建築素材』の中でも最も古い歴史をもっており、いまから約6000年以上も昔の中東で、粘土と藁を混ぜ合わせたものを日光で乾かして固めたものがレンガの起源と言われています。

このように、素材にはそれぞれ固有の歴史があり、実際に訪れた国や街で目にした舗装や建築に使われている素材の起源や歴史、施工法を知ることが、素材の特性や個性を理解するための大きなヒントとなったことをあらためてここで記させていただきます。

色彩とテクスチャー | やきもの素材の可能性

土木やランドスケープ、建築に用いられる素材のほとんどが、その物理的な特性（精度や強度・耐久性、色合いや模様など）や、入手経路（産出地域）によって、必然的に「選択」される素材であるのに対して、「レンガ」や「タイル」は、原料である粘土やシャモット（骨材）の配合によって物性が変化し、人の手によって作られる「型」によって様々なテクスチャーを生み出し、作られる場所（粘土の産地）、選択する顔料（主に金属酸化物）と焼成する温度によって絶妙な色彩を作り出すことができる、実に多くの可能性を秘めた素材である一方、「焼く」という行為によって、窯から出るまで仕上がり具合が判らない、素材の中でもとりわけ精度の確保が難しい素材です。

サロンの中でも触れましたが、実際あまりにも多くの選択肢があるために、その選定を一層難しくしているように感じます。

ではどのようにして色合いやテクスチャーを選定するのか？その回答として、加藤さんの色彩とテクスチャーの関係性についてのお話はとても勉強になりました。

これまで私自身が実際に素材や、色合い、テクスチャーを選定する際、原料の調合バランスや、成形方法、温度といった、

「作り手」としての知識と、これまで見てきた様々な素材の表情、言わば「伝統的な技術」からのアプローチによって、「職人的」「感覚的」に色彩とテクスチャーを組み合わせて方向性を導き出していたのに対して、加藤さんは、「地となる背景」と「重なり合う要素」の中から、いったん色だけを抽出し、徹底的に分析するという緻密な作業の中から選定すべき色彩の傾向を選び出し、さらにもう一度素材に立ち返ってテクスチャーを重ね合わせるという、実に論理的な方法でアプローチされていました。これは素材を職能とする私にとっても、とても参考になったと同時に、「95%は理詰めで行く」という加藤さんの言葉から普段何気なく目にしていく景色の中で感覚的に捉えている様々な色彩の関係性やバランス、素材について、あらためて考える大きなきっかけとなりました。

あらためて思う、素材と色彩のこと

実際に素材に関わる仕事をしていて真っ先に思うことは、「仕上げ」に限定されない素材の特性は、設計のプロセスにおいて決して切り離すことができないものだということです。木や鉄、コンクリート、レンガは「仕上げ」に限らず「構造体」としても用いられます。土木や景観のエンジニアやデザイナー、建築家、施工者がひとつの素材を選び出す時には、その物理的な特性と同時にそれらをデザイン的に活かす方法をさまざまな角度から考え、総合的な判断が求められます。そういう意味で、素材は建築、土木、ランドスケープなど、全てのものづくりの現場で、実に多様な役割を担っています。さらに「仕上げ」としての素材には、色彩やテクスチャーといった要素が重なり合うことで生み出される表情によって、空間を意味のあるものにしていく力があります。

加藤さんのお話を聞きながら、素材にも色彩にも必ず内在的な価値があり、それが空間全体の枠組みと適用の中で抽出され、デザインに組み込まれた瞬間に、それぞれの素材と色彩の持つ感性が共鳴し合いながら、全体の構成にさらなる深みをもたらされるのだということをあらためて感じました。

現在、デザインや設計のプロセスの中で、とかくカタログの中から選ばれがちな素材の中には、実はコストの大幅な増がなくとも入手できるものや、レンガやタイルのように、メーカーではなく産地や製造工場を選定することによって新たな色彩やテクスチャーを作り出すことが可能な素材もあります。歴史や風土、文化から導きだされる、またはデザインや空間の構成によって導きだされる素材と色彩を様々な可能性の中から選び出し、さらに組み合わせるという作業は決して容易なことではありませんが、素材や色彩には、カタログには掲載され尽くせない多くの選択肢があるということを、皆様知って頂けたのではないかと思います。

今回のサロンでは、「素材から導きだされる色彩」と「色彩から導きだされる素材」の在り方について、多くの方々と議論することができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。また、加藤さんのような色彩のプロフェッショナルと出会うきっかけを作って頂いたGSDy代表の岡田裕司さんはじめスタッフの皆様、本当にありがとうございました。

機会がありましたらぜひ、実際のものづくりの現場をご覧頂きたいと思います。そこには、風景を醸し出すディテールのヒントがたくさん溢れています。

Ground Scape Design youth Salon

風景を醸し出すディテールのデザイン—素材・色彩から考える風景— ～対談を終えて

色彩計画家・加藤幸枝

●風景を醸し出す色彩のディテールとは

去る7月30日に行われたミニシンポジウム、快諾してはみたものの、後日このようなテーマを頂いて少々面食らってしまった。

Ground Scape という時のスケール感に対し、ディテールという言葉の持つ繊細さをどう行き来すれば良いのか、と迷いが生じました。建築や工作物など屋外環境を構成する色彩はいずれの段階においても人の目に直接触れるものであり、遠景・中景・近景・近接と、視点場の変化に応じ、その見え方が移り変わることは風景の多様性に深い繋がりを持っている、そしてその細やかな変化の様を共に考えてみるのが、色彩のディテールというテーマにふさわしいのではと思うようになりました。

そこで当日は色彩の見方・見え方という点に的を絞ってお話することとしました。色彩の見え方は個々の良し悪しや好き嫌いで決定付けられるものではなく、周辺環境との関係性(図と地)により“そのように見える状態”が作りだされていることや、風景を支えている色について、等の話題を提供させて頂きました。

●何を・どのように見ているか

自身を含めて、普段の生活の中でどの程度しっかりと周辺の環境をどの程度見ているか、見るという行為の深度について最近よく考えています。見ているつもりでいることも多いですし、あまりの色の反乱ぶりに、見たくないものは見ないという意識が知らないうちに働いているように感じることも多くあります。例えば海を眼前にした際、波が作り出すカタチや音、陽が沈む様子など、見飽きることがないという表現を用いることがあります。そうした風景を目にした際の見ているという状況と、普段私達が暮らしの中で自分達の居場所を見ている、ということには大きな差異があるように思います。

環境色彩デザインの手法の一つである、モノの色を一旦カタチや素材から切り離しその色を再構築して環境に戻す、という考え方は、個々の色を見ることはもとより、その場の雰囲気や構成している色の構造を見出すとする行為に他なりません。

●数値や言葉に置き換えられない価値を創造するために

この世界にはその場に行かなければ体感できない雰囲気や時の移ろいがあります。長く時間を経過したもの、あるいは決して美しいとは言えなくともそこはかとなく心を打つ風景というものが存在し、その価値は恐らく強力な個人の意志によって提示されるものではなく、住む人や訪れる人を見出す・見出されるものという、とてもセンシティブな人と場とのかかわり合いの中で成立するものだと考えています。

インターネットの普及により同じ興味を持つ人と年齢や職業を超えて繋がることができたり、思いも依らぬところからリアクションが来たりとコミュニケーションにおける新しい価値が生まれつつある一方、先人達が築いてきた文化やその地域独自の暮らしの在り方等は、意識して・協力して引き継ごうとしなければ効率や機能性の名のもとに失われる可能性が圧倒的に高く、実際に大きな変化を遂げてきました。

現地の色を数値化し、客観的に全体像を把握することが環境色彩デザインのスタートであることには変わりませんが、それだけでは時間の経過がつくる風格や趣、その場で起こる行為によってしか味わうことのできない雰囲気といった要素を再現することは出来ません。

特にその点(＝雰囲気をつくる)において色彩は素材(+テクスチャー)と深い繋がりを持っており、色彩を計画する＝素材の選定が重要な役割を果たすということ、田村氏のお話からも十分に伝わったのではないかと考えています。

●心地よい状況をどのように作り、その状態をどう維持するか

環境色彩デザインという仕事に携わるようになり、都市やまちの時間の経過、ということ強く意識するようになりました。技術の進歩によりメンテナンスの容易な建材も数多く出現した結果、まちにある建築や工作物、ストリートファニチャーや路面の舗装など、様々な要素の年齢の重ね方に大きな差が出始め、その更新のされ方の違いが長い時の経過

を単に古くみずぼらしいものとしての印象を与えがちであるとも感じています。

地域に長く根付いてきた色彩（・素材）を受け継ぐ、と一口に言ってもそれが一時的な感傷や将来的に維持することが著しく困難な場合等もあり、その点は十分に考慮しなければならず、素材や色彩そのものだけの善し悪しを判定することはある種の危険性を孕んでいます。

素材や色彩を選定する際、周辺を十分に把握してという行為の中には、こうした場の現在の状態とその将来像を見据える、といった視点も必要なのではないか、今ある環境に置かれる新しい何か、良い状態を維持することが可能な方法を考えて行く必要があると思っています。

●地となる背景、図となる彩り

環境色彩デザインにおいて風景とは、土地利用や時代の変遷、更に人々の暮らしぶりの変化の中で少しずつ変わりゆくものである、というように少しおおらかに捉えている部分があります。建築の意匠や外装色彩にも年代を追うとある流れを見てとることができます。それがまちの面白さでもあり、変化して行くという前提の下、より良くという視点を持ち続け創造していくという意志ももちろん必要です。

そうした創造行為の中で、環境における色彩の役割はその場において際立つべきものとその見え方を支える背景という相互の関係性やバランスについて、他の多くの専門家とその意識を共有できる方法論を構築し、様々な具体的手法を提示して行きたいと思います。

彩りは建築や工作物だけが担うとは限らず、まちなかの art やファッション、四季折々変化する植栽、お祭りの山車や神輿等もまちの彩りを構成する要素として重要な存在です。そうした時間や季節によって変化したり一時的に場の賑わいをつくったりする色（＝図となる色）が引き立つような環境色彩の構造、を提示して行きたいと思います。その地の風景を長く支えてきたこと、モノは何か。全てはそれを十分に見て、次代に生かすべき要素を探し出すことから始まるのではないのでしょうか。

●素材と色彩の係わりから見えたこと

建築を見るのが好きだったことから次第にその素材に着目した田村氏のお話は、素材に魅せられた経緯からタイルという建材の今後の可能性まで、大変幅広く深度のある内容でした。田村氏はタイルという素材を“徹底的に見て”来られた方だと思いますが、それは決して仕上げという表層の扱いではなく、内部が人間の肌のように組織や筋肉で生成された、血の通う生物に近い感覚があるのではないかと、という印象を持ちました。もちろんタイルという建材はあくまで物質ですが、原料となる土は天然の鉱物です。製品が生成される過程の中で色を発したり火の温度によって色の出方が異なったりする様は、まさに命あるもの（＝自然）が作り出す色彩の現象性である、と思いました。

以前建築に携わる友人に『建築設計という業務において、複雑で時間のかかる様々な検討や諸手続き、打ち合わせ等の業務があまりに煩雑で、素材や色彩をじっくり考える余裕が無い』と言われたことがあります。最終的に外観の姿・カタチに大きな影響を与える仕上げを検討する余裕がないということに対し、私は至極単純に、『ならばその部分は設備や構造等と同様、素材や色彩の専門家と組めば良いのでは？』と感じたことをよく覚えています。

今回実際に田村氏の専門家としての職能に触れ、このような特化した知識と技能を持つ専門家の職能がより広く生かされるのが、個々の計画の質をより一層高め、その場にふさわしい風景の形成の寄与に繋がる、という思いを新たにしました。

以上、当日の議論を踏まえ、いくつかのテーマに少し補足してみました。多くの方々と議論をしたつもりでも、まだまだ多様な視点から深めて行ける内容だと思っています。また皆さんといつかどこかで、語り合える日を楽しみにしています。

最後に、声を掛けて下さった GSDy 代表の岡田裕司さんはじめ、告知や会場の準備など、大変手際よく進めて下さったスタッフの皆様方、本当にありがとうございました。

2011年8月8日



参加者からの感想

色は現象という言葉がとても印象に残っている。

外の光によっても、その人の気分によっても色合いは違って見えるわけで、そうなると色が大事というよりは、素材感や質感が大事なのかなとも思ってしまう。色を数値化するのにもどれほどの意味があるのだろう。雨に濡れて色が変わる素材もある。そしてひとくくりにしてしまう色の中にもいろいろな揺らぎが混じっている。

マンセル値や、彩度、明度の話を聞き、ちょっと色に詳しくなった気がしたが、結局さらによくわからなくなったような気もする。色ってなんなんだろう。

素材マニアっていうのもすごくかっこいい。レンガの刻印を追い求めて、あちこちへ行くという田村さん。素材を語るにはやはりそれくらい好きでないといけないのでしょう。刻印を手掛かりに、レンガが静かに語る歴史を読み解いていく。石や木などの土着的素材では地域性はたどれるけれど、人の手の加わった中間的素材だからこそそれが作られた当時に思いを馳せることができるのかもしれない。

写真を撮るとき（そして風景を見るとき）も、いつも全景ばかり気にしているけど、今度からはちょっとマニアックに素材のアップの写真も撮り集めてみて面白いらしいと思った。

普段身近にあるものの新しい切り口を教えてもらえた＆考えさせられる、とても刺激的なサロンでした。ゲストのお二方はもちろんのこと、企画してくれた岡田くん、どうもありがとうございました。

株式会社建設技術研究所 安藤 達也

建設業界のシンポジウムでプレゼンターがすべて女性だったのは、初めてでした。素材・色を決めることは、化粧をすることと似ているように思い、そこには女性的の感性が必要なのかもしれません。

また伺った話の中で加藤さんが「建築に景観の基調色を担わせるのは役割が重すぎる。こいのぼりなどの一時的なものがそれを担う方がいいのでは」とおっしゃっていたことが印象的でした。重すぎるが故、景観を制御していくルール（ボーダーライン）を作っていくべきではないのでしょうか。

加藤さん、田村さん、スタッフの皆さん、ありがとうございました。

株式会社 構造計画研究所 加藤 俊介

加藤さん〔講師〕からの追記：基調色の意味ではなく、景観を特徴づけたり、場の賑わいを創出するものが、建築や工作物の色ではなにの？という意味でした。よく伝えきれず、すみません.... 前述「地となる背景、図となる彩り」

普段、「まちづくり」ということを漠然と考えている時、自分の専門が土木と言うこともあってか、どうしてもマクロな視点から物事を見てしまいがちでした。しかも、そのことを恥ずかしながら今まであまり意識したこともなく。

その意味で、小さなところから素材を積み上げていく、というディテールの意識は自分にとって新鮮なものでした。また、同じく色彩も、「普段から触れてはいるけれど意識はしていない」ものであり、それを意識化するきっかけになった今回のサロンは、自分にとってまちを見る新たな視線を与えてもらえる機会になったと感じています。

東京大学 景観研究室 修士2年 金井 雄太

サロンのテーマである素材と色彩。これらは何かを覆い隠す化粧ではないにせよ、モノの表層を担っているのは確かです。そして、化粧的にと言いますか、たとえそれが偽物だとしても、目の前にあるものから受ける印象からは逃れにくいものです。表層はそれほど強さがあると思っています。

ゲストスピーカーのお二方のお話を聞きながら、どうやって素材や色彩はモノの表層を越えるのか、ということを考えていました。大切な事は何を表象するかであり、当たり前のことですが、それは”人が自然に分け入って作りだした、人が生きる場所”であることに他ならないはずですが。しかし、これではまだまだ広く、浅い。

技術の集積であるタイルや煉瓦などの建材、使われた材料に影響される色彩。今回、これらは地域に深く根付くものであり、そこで生きてきた職人や素材そのものと不可分の関係にあることを再認識させられました。

何代にも受け継がれる技や風雨に晒されてきた自然

材料。これらに比べると人の一生は短く、自分が暮らしている場所との大きな流れも意識しづらいかもかもしれません。ところが、建築に向かう行為によってここが繋がり始めました。地域に眠る要素と深く関わることで認識のスケールは“ここで暮らす、わたしたちのもの”にまで澄んでいきます。

これは言うまでもなく公共の有るべき姿であり、私自身が目指すモノの捉えられ方でもあります。これをどうやって勝ち得るか、とても難しく思います。人為ではならず、如何にして無数の“わたしの目”を触れさせるのか…。今後もお二方の発信に目を向けつつ、考えていきたいです。

PCKK 志田 悠歩

風景とディテール。

僕自身、建築設計に関わっているがサッシュの厚みや庇の大きさ、形、素材など外部に接するものすべてのディテールが

そのまちの風景に関わってくる。

丁寧につくられたまちは時間が経っても色あせることはなく

修復 / 修繕を繰り返しながらその土地に馴染んでいく。

建築の視点からすると色と素材だけを特化させて

生業として仕事されていることには正直驚いた。

分野を横断した、というよりも建築 / 土木という焦点のあて方とは異なる焦点のあて方に非常に興味深く話を聞かせて頂きました。

素材一つで、色一つで風景（建築）が立ち上がる。そんな根本的なところに立ち戻らせて頂き、ありがとうございました。

早稲田大学 高橋 広樹

「素材と色」というテーマは、これまでまとまった話を聞く機会も無く非常に新鮮で興味深いお話でした。

土木を専攻しているぼくは、街路や広場の舗装や、ファニチャーの色彩に普段から目がよくいくのですが、いざ自分で設計を考えるとちゃんとしたハウツー本も手に入りづらく、感覚で決めるしかないの

かなー、という漠然とした考えしか持っていませんでした。

田村さんの素材のお話は、プロジェクトの余条件と設計意図、施工性などが素材選定にいかに関わってくるのかということから、ひとつの素材を決めるにいたる苦労と時間スケールがありありと伝わってきました。

加藤さんの色のお話では、「色彩は現象」という衝撃的なスライドから、配色を関係性やリズム感で捉えることの重要性和、感覚ではなくかなり解析的・定量的に色彩を決定していることに驚きを感じました。そこからの質疑での「95%までは理詰めでいく」という加藤さんの発言で、ぼくがこれまで持っていた「素材や色って感覚なのかな」というモヤモヤは吹き飛ばされました。

ディテールが決定されていくプロセスが垣間見れた今回のサロンは、ぼくのこれからの設計の中で大きな抛り所となりそうです。

楽しいお話、ありがとうございました。

東京大学 景観研究室 修士1年 高浜 康亘

加藤さん [講師] からの追記：95%は目標です、実際は80%ぐらいかも....。

はじめて聞く色と素材の話。

聞きながら、気づくと五感を澄ませていた。

感覚的な概念ながら、「色をとことん理詰めで解く」という言葉が印象的で、感覚=ふわっとしたものではなくて、理屈のとおりものだと思うと地に足がついた気がしてなんだか安心した。

素材の話を聞きそびれて惜しかったが、ディテールサロン、小さくて大きな話。とても面白かったです。

(財) 鎌倉市公園協会 平田 有紀

白模型について考える。

建築の模型をつくるときは、いつもスチレンボードを使う。

上質紙が張られた発泡スチロールの薄い板。

真っ白で、テクスチャも何も無い。
この模型の白さに、今まで疑問を持ったことはあるだろうか。

はじめてつくった建築模型は、コルビュジェのシトロアン邸だった。
これもまさしく白い建築。
モダニズムは闇を排除してきた。光につつまれた白の空間。
その流れが現在の教育現場にも引き継がれている。

白模型は美しい。
一方、本物に忠実に着彩され、テクスチャの貼られた模型はジオラマのようで、俗だと教えられてきた。
設計思想を表現するには、色やテクスチャは時に邪魔な存在となる。
白模型は思想の現われであり、実際に建てられる建築のミニチュアでは無い。
演習では設計思想を如何にカタチにするかが問われ、白模型どまり。
これも現在の教育現場。

いつからまちに白い建築が増えてきただろう。
いつから建築模型にスチレンボードが使われてきただろう。
まちには白模型があふれている。
教育を変えねば。

立命館大学大学院 松宮 かおる

普段、街を歩いていると、素材の素っ気なさに、色彩の煩雑さに愕然とします。なのに、あの日スライドで観た素材や色彩は、とても美しいものでした。中でも一番驚いたのは、土や砂のコレクションでした。単に色んな場所の土や砂が瓶詰めされ、並べられているだけ。なのに、あれほどまでに美しく、かつ優しい。あの写真に素材と色彩の可能性を感じ、同時に如何に自分が土に、地面に、場所に、素材に、まだまだ感受性が足りていなかった事を知り、学びました。白状してしまえば、知識を蓄えたくて参加したサロンだったのですが、お二人の話によってもっと根源の大事な地

点まで連れて行って貰ったように思います。心躍る一夜でした。

EAU 山田 裕貴

田村様、加藤様大変興味深いお話有難う御座いました。

加藤様のお話の中の「染料文化」と「顔料文化」。帰宅後に少しその事について考えていたのですが、「染料」の文化は自然物から採取した染料と色付けする対象の物質との関係性によって形作っていくという点で「顔料」の文化に比べて、自然主体の世界感が形成されている様に思います。

少々乱暴な考察ですが、元来アニミズム的な素地がある日本の文化は「染」の思想があり、こと建築や景観などに関しても色彩や形態、素材を「与えられている」という意識が何処かにあったのではないのでしょうか。

一方で現代においては、作家やモノそのものに「私性」が求められる事、空間・構造・材料・色などを個別に思考して成立する様になった事、流通によって材料の自由度が増した事など、「与える」という意識の元でものづくりがなされている様に思います。

この様な現代の状況下で、「与える」事への違和感に対しての解答の一つを田村様のお話しされていた「中間的素材」に見て取れました。

先程も記述しましたが、現代では流通や経済が発達し材料に対する自由度が非常に高くなっています。「素材感のある木の家」が北米産の構造体と南洋産の合板で出来ている事には正直違和感を感じてしまいます。ここで求められている「素材」というのは本質的には「与えられる」ものである必要があるのではないのでしょうか。

田村様のお話しされていた「中間的素材」には材料選定の段階から、火や水を使い焼き上げる所まで「与えられる」という意識があり、それが我々に共感をもたらす理由だと感じました。

実際のプロジェクトでは経済的な理由や現代の社会の

仕組みによって「与えられる」ものづくりが難しくなっていますが、今後私もその方法を模索していきたいと思えます。

重ね重ねになりますが、貴重なお話を聞く機会を頂き、田村様、加藤様、また企画をしてくれた岡田様に感謝を致します。

山田敬太



企画者あとがき

今回は、常々考えていた「ディテール」と「風景」について、古くからのお知合いである田村さんに「素材」について、Twitterを通してお知合いになった加藤さんに「色彩」についてと、素敵なお姉様お二人に抽象的なテーマ設定のままにご講演をお願いしました。

そんな無理強いにも関わらず、当日は非常に素晴らしい回答を示して頂き、サロンが終わった頃には心の中モヤモヤがスッキリとしていたことは驚きでした。企画者が一番楽しんでた夏夜であったことは疑う余地ありませんが、参加した皆様にとっても刺激のある夏夜であったようでありました。

さて、僕ら若者はこの刺激を常に頭の片隅におきながら、いかにして個々の専門分野で戦えるか、これにつきると思います。“〇〇マニア”になっていくことが求められる中でいかに広い視野を持ち続け、「風景」と向き合っていくか。議論の白熱した様からも同じ志をもった仲間がたくさんいることが再確認できた夏夜だったように思います。

最後に、ご講演頂いた田村さん、加藤さん、そしてご参加した皆様、準備運営を手伝って下さった皆様、本当にありがとうございました。

早稲田大学大学院 /GSDy 代表 岡田 裕司

